

1. こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、また神の奥義の管理者だと考えなさい。このばあい、管理者には、忠実であることが要求されます。(4:1-2)
 - a. ここで言われている「私たち」とは具体的には「使徒たち」のことを指している。使徒たちは信者のコミュニティーの中では最も高い位/任務についていた。イエスが神の御国で一番すぐれているのはしもべです、と教えられたように、パウロは私たち使徒はしもべ、管理者であるように、と説いている。
 - b. このしもべや召使いという概念は私たちすべてが目指すべき姿である。これは、ご自身がへりくだりしもべとして仕えてくださったキリストに似た者となるためのプロセスである。もし私たちが単なるしもべや管理者であるなら私たちの態度や行動にもそれが表れるべきだが、主が豊かにしてくださっている時はそのバランスが難しい。コリントの教会にもその問題があった(7-10節)。
 - c. キリストにあって成長、成熟していくのは一生かかるプロセスで、それには刈り込み、痛み、拒絶を伴う。私たちはしもべや管理者という立場でありながら父や母のような心を持たなければならない。

2. しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるのではありません。私をさばく方は主です。(4:3-4)
 - a. キリストにあって成熟してくると、あなたについて不当な評価をする人が出てくるのは避けられない。ここでパウロが言っているさばきとは、罪に対してのさばきではなく、彼の使徒としてのミニストリーに対してである。以前学んだ箇所では、人々がパウロ、アポロ、ペテロのミニストリーを比較し分派に割れていたが、主のための働きをする時には一人一人が違う役目を持ち、それがどのように見えどのように行われるかは神にしかさばくことができない(私たちが仕えるのは神なので)。
 - b. パウロは「書かれていることを越えない(6節)」ためにこれらすべてのことを当てはめている。これは他の人のレースを走るのではなく、神のご計画されたコースから外れないための注意である。
 - c. 私たちの態度は、私たちが持っているものはすべて神から受けたもの、ということを反映してはならない。自分のものはすべて関係ない、という虚無主義的なことではなく、一生懸命仕事ができるのも神の恵みであるので、自分の功績よりも神に栄光を帰す、という姿勢である。最後には神が正しいさばきをされる。

3. ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。(4:5)
 - a. 私たちの中には将来の報酬を楽しみにしている者もいるが、やみに隠れたものについては先走ったさばきをしてはいけない。ただし明らかに罪であることや罪ある行動に対してはさばきが必要である。パウロはこの章の終わりで、またこの後数章にわたって罪のさばきについて述べている。
 - b. 最後の審判に先立つさばきの目的は、恥をかかせるためではなく、警告を与え、過ちを正し、築き上げ、方向転換をさせ、態度を改めさせ、最終目的地を変えて最後の審判の時には主からの称賛を得られるようにするための、ある意味ではギフトである。
 - c. 私たちが地上の生涯を終える時、キリストに従うために大変な苦難を通り(9節)それを乗り越えた者には聖書が言うように報酬、称賛、相続遺産が待っている。